

年間第 25 主日

マルコ 9:30-37

2012 年 9 月 23 日

イエズス会司祭 小暮康久

今日の福音の中で、イエス様は「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」と言われます。司祭としての初ミサの福音で、この御言葉が与えられたということに私は不思議な感動を覚えています。「すべての人に仕える者になりなさい。」これは司祭という召命を頂いた私の生涯のテーマとも言えるからです。神様は、私が司祭として生涯をかけて追い求めていくべき生き方、すべての人に仕える者になるというその姿を、この初ミサという本当のスタート地点ではっきりと私に示されたのだ、今日の福音を読んだ時、そんな風感ぜずにはいられませんでした。「しっかり、すべての人に仕える者になりなさい。生涯、このことを心に刻んで、歩いていきなさい」イエス様からそう言われたような気がしています。

今日は、この「仕える者」になるということについて、ご一緒に味わってみたいと思います。実はマルコ福音書の中で、この「仕える者」という表現は二つの箇所だけに出きます。もう一つの箇所は 10:35-45 です。ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに、「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」と願った、それを聞いた弟子たちが腹を立てたというあの場面です。この場面でも、弟子たちの関心は同じように「誰が偉いか」という点にあります。その時、イエス様は同じように言われるのです。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」と。ここでも、「仕える者」になるということが強調されています。

この二つの箇所に共通していることは、お話したように、「誰が偉いか」という関心を巡って弟子たちが言い争いをしているという点なのですが、もう一つ共通している点は、このイエス様の「仕える者」になるという表現が、ご自身の十字架と重ね合わせて語られているという点です。今日の福音箇所では、弟子たちの言い争いの直前に、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」とご自身の死と復活を予告しています。その十字架の眺めの中で「仕える者」になるということが弟子たちに語られるのです。また、先ほどの 10 章の箇所でも、ヤコブとヨハネの願いを聞いたイエス様は、

「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」とこれからおこる受難と十字架に触れた後に、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」と語ります。十字架と「仕える者」になるということが重ね合わせるように語られるのです。イエス様にとって、「仕える者」になるという生き方と十字架は、切り離すことのできない一つのことであったということです。

「仕える者」と訳されている言葉は「奉仕者」とも訳される言葉、*διάκονος* (ディアコノス) ですが、私たちが「仕える者」や「奉仕者」という言葉をイメージする時、そこで直接に十字架の死をイメージすることはないかもしれません。実際、「仕える者」ディアコノスという言葉には、本来の意味として、食卓の給仕人など、実際の細々とした働きを通して仕えるというイメージがあります。その意味で、私たちも、教会や、家庭、職場などで、実際の働きを通して誰かに仕える、誰かに奉仕するという時、間違いなく「仕える者」ではあります。しかし、イエス様が、「仕える者になりなさい」という時、そこで大切なのは、単に、外面的な行為として「仕える」ということだけではなく、内面的にもその「仕える」相手を本当に大切にす、自分ではなく、その人を中心にする、そういう意味での「仕える」ということだということです。

例えば、サービス業において、サービスの対価としてお客さんから代金を得る場合、その代金自体が目的の場合、それは形式上の「仕える者」「奉仕者」にすぎないということです。しかし、例えば、一流のウェイターは、そのテーブルについてお客さんに、本当にその時間を心から楽しみ、くつろぎ、満足して過ごしてもらいたいと心から望んでいる、だから、そのお客さんが望んでいるサービスを、かゆいところに手が届くように、その時、その時に提供することが出来るという話を聞いたことがあります。この場合、明らかに「仕える自分」ではなく、その「仕える相手」が中心になっています。サービスの対価としてお客さんから代金を得るサービス業という場面であってさえも、そこに本当に相手を大切にす「仕える」心があるならば、「お金がもらえればいい」というサービスとはまた違った世界が開かれていくということです。

「仕える自分」ではなく、その「仕える相手」を中心にする、つまり「仕える」相手を本当に大切にす、そういう意味での「仕える者」になるということが、イエス様において極みに達します。イエス様こそは、ウソ偽りなく、大袈裟でもなんでもなく、文字通り「すべての人に仕える者」となられたからです。イエス様の仕える極みの姿は、「多くの人の身代金として自分の命を献げる」という姿です。私たちの命のために自分自身を与えるという姿です。ご自分の命を与えるほどに、私たちを大切にされた「仕える者」の姿です。それが十字架です。

キリシタン時代、私たちの先輩は、神様の愛を意味する「カリタス」という言葉を、今のように「愛」という言葉ではなく、「ご大切」と訳しました。「ご大切」、それは文字通り、身を切るほどに相手を大切にすることです。逆に言えば、自分に痛みを伴わないような行為は、「ご大切＝愛」とまでは言えないのかもしれませんが。イエス様の愛が本当の「ご大切」であったこと…それは十字架が示しています。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」という言葉は、イエス様のように、仕える極みの姿にまで仕えることへの招きであるということです。しかし、これが簡単なことではないことは私たち一人一人が痛いほどに知っています。こんなことができるためには、自分の力というよりも、神様からの大きな恵みが必要であるからです。この御言葉を証した一人の人がいました。私の洗礼のきっかけとなったマキシミアノ・コルベ神父です。アウシュビッツ収容所で身代わりの死を自ら申し出たコルベ神父は、この御言葉を生きたその証人（あかしびと）です。

私たちが「仕える者」となっていくために出来ることは、毎日の小さな一歩、一歩の積み重ねの中にあるのだと思います。それは毎日の生活の中で出会う一人一人に、少しずつでもいいから愛をこめて向き合うこと、大切にしていくこと、「ご大切」にしていくこと、こんな毎日の小さな積み重ねの中こそ、イエス様が望んでおられる「仕える者」になっていく道があるのだと思います。私たちがその道を歩んで行くことができるように、その恵みを共に願ってまいりましょう。